

【学研究論文】

ソーシャルワークにおける 行動アプローチの台頭

武田 建

The Rise of Behavioral Approach in Social Work

Ken Takeda



2010年3月

総合福祉科学研究

Journal of Comprehensive Welfare Sciences

【学術研究論文】

ソーシャルワークにおける行動アプローチの台頭

武田 建*

The Rise of Behavioral Approach in Social Work

Ken Takeda

要 旨

ソーシャル・ケースワークの歴史をふり返ると、初期の段階では Sigmund Freud の精神分析の影響が非常に強かった。この人たちの立場が診断主義である。これに対して、Otto Rank の will therapy の影響を受けたのがペンシルバニア大学社会福祉大学院を中心にした機能主義とよばれる立場であった。両者の戦いを吸収し、収束させるような形で Helen Perlman の問題解決アプローチが第3のグループとして登場した。そして、Edwin Thomas が第4の流れとして、行動アプローチを社会福祉の領域に持ち込んだ。この行動アプローチが、どのように我が国の社会福祉に到着し、発展してきたかをふり返る。

Abstract

Looking back the history of social casework, Sigmund Freud's psychoanalytic theory and method was a dominant school of thought which was called diagnostic group. Then Otto Rank's will therapy influenced the University of Pennsylvania social work group which was called themselves as functionalism. It was a heat battle, between two schools of thoughts. The rise of problem solving group head by Helen Perlman became the third group. Then behavioral approach headed by Edwin Thomas was considered the fourth power. How the behavioral approach came to social work in Japan was reviewed. The works of those who are considered as behavioral social workers were introduced.

● ● ○ **Key words** 診断主義学派 Diagnostic School / 機能主義学派 Functional School / 行動アプローチ Behavioral Approach / ペアレント・トレーニング Parent Training

I 行動アプローチ出現までのケースワーク理論の変遷

1. Mary Richmond から診断主義と機能主義まで

社会福祉における対人援助には、クライアントを理解するための理論と援助する方法についての理論が不

可欠である。我々の先達たちは、ソーシャルワークというプロフェッションが始まった頃から、その点に配慮してきた。現在では社会福祉援助技術と呼ばれているが、昔はケースワーク、グループワーク、コミュニティー・オーガニゼーションという3つの領域と方法

* 関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授

から成り立っていた。そして、昔も今もソーシャルワーカーの大多数は、かつてはソーシャル・ケースワークと呼ばれた領域で働いている。

そのケースワークの母と呼ばれたのが Mary Richmond である。彼女が1917年に書いた『Social Diagnosis』（社会診断論）¹⁾ は最初の本格的な援助技術の体系化への試みであった。ただ、この本が出版された1917年には、パーソナリティ理論を援助技法のバックボーンとしてケースワークに統合するには、時期尚早であった（黒川1985）²⁾。その後、彼女は1922年に『What is Social Casework?』³⁾ をあらわしたが、その中では精神分析が重要な部分として取り扱われている。

黒川は、「1920年代は、ケースワークに精神分析が導入された時期であり、Sigmund Freud の創始した精神分析は、・・・さまざまな領域に多大の影響をおよぼした。だが、ケースワークにおよぼした影響はそのうちでも最大なものであったといっても過言ではない」と説明している（黒川1985）⁴⁾。

1909年、マサチューセッツ州のクラーク大学学長の Stanley Hall は同大学の創立20周年記念に Freud, S. をはるばるオーストリアのウインから招いた。Freud, S. にとって、これが初めて大学というアカデミックな世界での講義であった。こうして、Freud, S. の精神分析は米国のひとびとの注目と関心を集めるようになったのである（Jones, E.J. 1961 = 竹友安彦・藤井治彦1964）⁵⁾。「そして、精神医学や心理学に比べると学問的な歴史と伝統がはるかに短いソーシャル・ケースワークは、その理論と方法において、精神分析に大きく傾斜していった」（黒川1985）⁶⁾。

このことについて、黒川は、「他の学問領域への影響が比較的に深刻でなかったのは、それぞれの領域がはるかに長い伝統と確固たる方法や理論を持っていたため、学問体系の根底から影響されることがなかった、ということである。それに比して、ケースワークの領域では、1910年代にやっとケースワークが方法として確立したにすぎず、また学問体系としてまとまった著書が出たのも1917年であり、いわば幼児期に、精神分析という衝撃的な体験をしたということができ

あろう。また、逆に、ケースワークが精神分析を取り入れることができたのは、ケースワークがすでに理論と方法を持ち、一個の科学として独自の主体性を要求しうる程度にかろうじて成長していたということである。・・・その意味で Richmond の功績は大きい」と述べている（黒川1985）⁷⁾。

また、精神衛生運動や児童相談所運動が、精神分析とケースワークの関係を一層強めた。さらに、第一次および第二次世界大戦のために、兵士やその家族への援助をしなくてはならないという現実もあった。こうした状況のなかで、ケースワークは精神分析という新しい理論的枠組みを得ることによって、理論的にまた実践的に大きく前進した。

2. 対立の時代

Richmond, M. からバトンを受け継いだ Gordon Hamilton は『Theory and Practice of Social Casework』⁸⁾ を出版した。そして、Hamilton, G. を追いかけるように、Charlton Towle が『Common Human Needs』（公的扶助ケースワーク）⁹⁾ を出版した。この本は1945年に出版されたのだが、その進歩的な内容のために、米国連邦政府社会保障省が1952年に出版停止の命令を出し残本を焚書したのを、全米ソーシャルワーカー協会が同じ1952年に復刊したといういわくつきの本である。なお、我が国では2通りの訳がある。そして、さらにバトンは Florence Hollis へと引き継がれた。彼女は1964年に『Casework: A Psychosocial Therapy』¹⁰⁾ を出版するのである。

「彼女らの活躍に対し、他の学派からはあまりにも精神分析的な理論と方法に偏りすぎているとう批判が米国において、またわが国の研究者たちからもあがったことは事実である」（丹野2005）¹¹⁾。しかし、こうした精神分析的なケースワークの先達たちの働きなしに、現在のソーシャルワークの理論と方法はあり得なかったと筆者は考える。

「たしかに、1940年代には Freud, S. の精神分析を枠組みとする診断主義ケースワークが勢力を保ち、ケースワーカーがクライアントのパーソナリティあるいは

不適応といった問題を取り上げ、クライアントの精神力動を重視する傾向が非常に強かったことは否定できない。その結果、診断主義ケースワークは疑似精神分析と批判されることもあった」(黒川1985)¹²⁾。

一方、この時代には、Otto Rank の Will Therapy を枠組みとする機能主義ケースワークとの対立も激しさを増した。「Rank, O. は Freud, S. の弟子であったが、衝動の固まりのようなエスから、良心の塊のような超自我が生まれることなどに異議をとらえ、Freud, S. と袂を分けた。そして米国に渡り、人間には生まれながらにして自らを高め向上させる Will というものがあると主張した。そして、ニューヨークからフィラデルフィアに移り、ペンシルベニア大学を中心として活躍した。彼の影響を受けたのが機能主義ケースワークである。この立場はワーカーとクライアントの援助関係、とりわけ両者の関係を規定する施設の機能を重視したので機能主義と呼ばれるようになった」(高山2005)¹³⁾。

「こうした2つの流れの間の対立はケースワークの健全な発達を阻害するとして、The Family Service Association of America はケースワーク実践における基本的な概念を明確にする委員会を組織した。その研究成果は1950年に発表されたが、2つの学派の溝を埋めることは困難に見えた。しかし、1950年代後半になると、両者の対立は次第に収まり、統合に向かったのである」(黒川1985)¹⁴⁾。また、理論的には両者は対等であったとしても、数から言えば圧倒的に、診断主義のケースワーカーが多かったことも事実である。当時、北米に約60の社会福祉学専攻の大学院があったが、そのなかで機能主義の大学院と呼ばれていたのはペンシルベニア大学とノースキャロライナ大学の2校だけであった。他の大学院では診断主義の立場をとる教員が圧倒的に多かった。

筆者は当時の北米における社会福祉教育で Freud, S. の精神分析が如何に大きなウェイトを占めていたかを身をもって経験した。筆者は1956年から58年まで、カナダのトロント大学社会福祉大学院の修士課程に在学していた。2年生になったときに、研究科長であり当時北米のグループワークの権威者の一人と考えられていた Charles Hendry と院生の懇談会が開かれた。そ

の時、院生のなかから「何故私たちの研究科の方法論やパーソナリティ理論に関する授業では、精神分析の立場だけしか取り上げないのですか?」という質問があった。それに対して、Hendry は即座に「精神分析のように性格の形成から発達にいたるまでを包括的に取り上げている理論が外にありますか?」とその質問を切り捨てたことを思い出す。そして、「パーソナリティ、発達段階、援助の3つの断面を持つ理論は外にはない」と付け加えたのであった。

診断主義ケースワークと機能主義ケースワークの対立が続いている頃、臨床心理学とりわけカウンセリングで注目されはじめたのが Carl R. Rogers (1939)¹⁵⁾ (1942)¹⁶⁾ である。彼はコロンビア大学で臨床心理学を学び、ニューヨーク州ロチェスターにある児童福祉関連の施設に心理判定員として就職した。そこには、機能主義のメッカであるペンシルベニア大学社会福祉大学院を終了したケースワーカーたちが勤務していた。彼女らは Freud, S. のエスから自我や超自我が生まれてきたという理論と違って、人間の中にははじめから自らを成長し高めてゆく Will というものが備わっているという Rank, O. の考え方を信奉していた。この考え方は Rogers 理論の原点となった自己実現 Self-actualization と非常に良く似ている。Rogers, C.R. が機能主義ケースワーカーたちとの接触を通して Will Therapy (意志療法) の原点に触れたことは当然のことであった。そして、彼女らに近い考え方をもちたことは容易に考えられるところである。

高山は「Rank, O. は、セラピストとの関係を通じてクライアントが成長すると考えたが、このように援助関係そのものが意義を持つという考えは、クライアントとセラピストとの間に『今、ここで』起こる出来事に強調点を置くことにつながる。これは、フロイトが過去に起きた出来事や感情を重視したのとは対照的である。そして、このランクの考え方は Carl Rogers の非指示的療法の源流とみなされている」と述べている(高山2005)¹⁷⁾。

Rogers, C.R. がロチェスターの児童福祉施設の一心理判定員から、いきなりオハイオ州立大学の教授兼カウンセリング・センター長として迎えられると、当

時彼が提唱した非指示的カウンセリングには援助の理論はあってもパーソナリティ理論がないと批判された。こうした質問に対する答えとして、本格的にパーソナリティ理論の中核を19の命題として述べたのが『Client-centered therapy』(1951)¹⁸⁾である。この中で、彼は有名な self-actualization (自己実現) という概念を紹介している。この理論は「クライアントに周囲から脅威を与えられなければ、クライアントは自らを高め向上させる内的な力を持っているという極めて肯定的な考え方である。そして、その源をたぐってゆくと、1940年代の機能主義ケースワークとその源流である Rank, O. の理論にたどり着くのである」(仲村 1957: 62-67 in 高山)¹⁹⁾。こうして、機能主義ケースワークの元となった Rank, O. の Will という概念がカウンセリングの Rogers, C.R. に影響をあたえ、その Rogers, C.R. が今度は Felix P. Biestek の『The Casework Relationship』(1957)²⁰⁾を通して社会福祉のケースワークの価値ないし原則として、我が国の社会福祉に大きく取り上げられている。このように、多くの理論と方法が混在している今日、全く誰からも影響を受けない独自の新しい考え方を提唱することは非常に難しい時代に入ってきたと言っても過言ではなさそうである。

3. 協調への試み、そして群雄割拠

「社会的適応というより広い視点からクライアントを見るのが強調されるようになり、自我心理学や力動心理学の視点、さらには家族あるいは役割理論といった社会学や社会心理学的な概念がケースワークの理論的枠組のなかに取り入れられるようになった。こうしためまぐるしい動きのなかで、診断主義と機能主義の対立は次第に解消されるようになった」(黒川 1985)²¹⁾。

こうして、調和に向かった1950年代にかわって、1960年代には続々と多くの理論と方法が再び新しい衣を着て登場するようになった。主著の出版順に見ると、まず伝統的な診断主義あるいは機能主義の理論や技法のみならず、役割理論的な考え方もとり入れたのが Helen Harris Perlman の『Social Casework: A Problem Solving Process』(ソーシャル・ケースワーク：問題解決の過程)²²⁾によって紹介された問題解決アプローチ

である。次に、診断主義の代表とも言える精神分析の色彩が強い Florence Hollis が『Casework: Psychosocial Therapy』(ケースワーク：心理社会療法)²³⁾を出版した。これに対して、機能主義では Ruth E. Smalley が『Theory for Social Work Practice』²⁴⁾を出版している。当時、この3つがケースワークにおける大きな流れであった。しかし、すぐに第4の流れとして行動変容アプローチの Edwin J. Thomas が『Socio-Behavioral Approach and Applications to Social Work』²⁵⁾を編集出版し、もう一つの旗頭になった。さしずめ、この4つの流れが当時の四大メジャーということになる。

1969年5月1日から3日間、シカゴ大学は長年同大学で教鞭をとった Charlotte Towle の功績を記念して、シンポジウムを開催した。これは、当時のケースワーク理論を代表する人たちが一堂に会し、それぞれの理論を述べるという試みであった。すでに述べた Perlman, H., Hollis, F., Smalley, R.E., Thomas, E.J. に加えて、1960年代になって急速に盛んになった家族療法から Frances H. Scherz²⁶⁾、さらには危機介入アプローチの Lydia Rapoport²⁷⁾がシンポジストとして招かれたのである。

このシンポジストたちが後にシカゴ大学の Bernece K. Simon²⁸⁾のガイドラインに沿って自分の原稿に加筆修正したものが、Roberts, R.W. と Nee, R.H. の『Theories of Social Casework』(ソーシャル・ケースワークの理論：7つのアプローチとその比較)²⁹⁾である。この本は当時のアメリカのソーシャルワークの豊富な実践理論の豊かさを示すものであった。

「この当時の社会福祉とくにケースワークにおいて、ソーシャルワークの実践理論が華々しく展開され、その後計画的な短期性を重視した課題中心アプローチ、エコロジーや一般システム論の導入により、新たな包括的理論が次つぎと生み出されている。Germain, C.B. と Gitterman, A. (1987)³⁰⁾(1996)³¹⁾のライフ・モデルはその代表であろう」(芝野 2002)³²⁾。

II 北米の社会福祉における行動アプローチの出現

1960年代から70年代にかけて、ケースワークでは実にさまざまな流れが始まった。そのなかでも、行動アプローチは実証的な援助方法の確立という点で見るとべきものがあった。これまで述べてきた、多くのケースワークの流れの背後には、援助の理論とならんでパーソナリティ理論が存在するのが特徴であった。しかし、心理学の基礎的な実験から生まれてきた行動アプローチには、いわゆるパーソナリティ理論はなく、実験室から出てきたリスボン条件づけ、オペラント条件づけ、モデリングといった実験に基づく理論がその根底になって始まった。この点が、それまでのケースワークを支える理論ならびに方法とは大きく異なると言えよう。

1. ミシガン大学社会福祉大学院

1960年代から70年代にかけて、米国の社会福祉の研究、教育、実践の領域で行動アプローチの有効性に最初に目を向けた一人がミシガン大学のEdwin J. Thomas (1967)³³⁾ (1971)³⁴⁾である。彼はウェイン州立大学大学院の社会福祉学専攻で修士の学位を取得した後、ミシガン大学で社会心理学を学び、博士の学位を取得した。その後、彼は同大学の社会福祉大学院で社会福祉学と心理学の2つの領域の教授という肩書きで活躍し、社会福祉の理論的研究のみならず、社会福祉の実践領域においても注目を集めていた。

そして、ケースワーク援助を更に有効なものに、しかもその効果を客観的に観察可能なものに発展させようと、行動理論を社会福祉の領域に導入したのである。こうして、彼の存在は社会福祉理論と実践の世界で、極めて大きなものとなっていった。それにつれて、同大学の社会福祉大学院の教員たちのなかにも、Thomasの影響を受けて行動アプローチを基盤において実践ならびに調査をし、また理論を展開する人たちが現れた。ミシガン大学からユタ大学に移ったRobert D. Stuart (1967a)³⁵⁾ (1967b)³⁶⁾ (1971)³⁷⁾ (1972)³⁸⁾はワーカーとクライアント、夫と妻、親と子の間で「貴方が○○をすれば、私は□□をしましょう」というContingency Contractという方法を開拓したことで有名である。ウイ

スコンシン大学に移り、後に関西福祉科学大学で講演をした行動グループワークのSheldon Rose (1973)³⁹⁾ (1980)⁴⁰⁾がいる。そして、教え子のなかには、ミシガン大学で教鞭をとったRobert D. Carter (1977)⁴¹⁾、パークレーのカリフォルニア大学社会福祉大学院の教授になったEileen D. Gambrill (1977)⁴²⁾をはじめ、多くの研究者や実践家を輩出している。そして、その流れは単にミシガン大学のみならず、セントルイスのワシントン大学やシカゴ大学といった社会福祉の名門大学院に急速に広まっていった。

医学の領域のみならず、社会福祉の現場においても、「介入の効果が本当にあったのか？」という実証を絶えず求める米国では、「目に見えるもの」「ひとつふたつと数えることができるもの」というエビデンス・ベースド・アプローチが大きく注目されるようになってきた。そして、1970年代には、米国やカナダの多くの社会福祉大学院では、必ずと言ってもよいほど、一人あるいは複数の教員が、行動理論とそれに基づく援助方法と調査方法を教えるようになっていった。

2. 援助技法としての行動アプローチとの遭遇

筆者がThomasの行動アプローチ・グループの1人であるRichard B. Stuartと出会ったのは、1967年から68年の1年間、ミシガン州デトロイト市にあるメリル・パーマー研究所の外来クリニックにおいて、精神医学・臨床心理学・臨床ケースワーク・臨床保育のポストドクターのインターンとして臨床訓練を受けていた時であった。グループワークの領域でRobert D. VinterやRosemary C. Sarriと並んでミシガン大学社会福祉大学院でグループワーク領域の著名な教授の1人であったPaul E. Glasserの紹介でStuartを訪ねた。その時に、「今後は社会福祉の実践でも、介入の効果を実証することは不可欠であり、それを実行するためには行動アプローチがベストである」と強く説得された。

行動アプローチについては、援助方法の一つの流れとして、ある程度関心を持っていたが、Stuartから正面切ってその重要性和効果を聞かされると、これから一年間の訓練の間に「本腰を入れて行動アプローチを勉強しなくてはなるまい」と思うようになったので

ある。

筆者がミシガン州立大学大学院生時代に1年間のフルタイムの実習をした古巣に、2度目の臨床訓練を受けに戻った理由は、1人のインターンに3人のそれぞれ異なる立場あるいは学派のスーパーバイザーをつけることになっていたからである。それにより、幾つかの臨床的な理論と方法を理解するだけでなく、さまざまな実践経験を積ませる教育と訓練を与えるのがこのインターンシップの特徴であった。したがって、毎週1人のスーパーバイザーのもとで1時間のスーパービジョンを2回ずつ、週合計6時間の個別指導を受けるのであった。

外来クリニックの所長であり教育訓練の責任者であった Aaron L. Rutledge は、筆者の関心が精神分析や来談者中心療法と並んで行動アプローチにも向きつつあることを知り、3人目のスーパーバイザーに行動療法の臨床家をつけたのである。筆者のスーパーバイザーになった Bailey, M. の指導方法は、行動アプローチの知識や臨床経験の乏しい筆者に、行動アプローチを少しずつ教え、少しずつ体験させていくという、まさにオペラント条件づけやモデリングの理論と方法そのものに沿ったスーパービジョンであった。

当時筆者が担当していたクライアントの1人は、子どもが自閉症でクリニック付属の障害を持つ子どもの保育園に通園しており、両親には毎週1回のカウンセリングがおこなわれるようになっていた。筆者は父親を担当することになった。この男性は対人接触において極めて消極的で、そのため夫婦の間にも亀裂がはやり、当時は別居中であった。筆者の面接をマジックミラーを通して観察したスーパーバイザーは、面接中にクライアントが「・・・かもしれない」「・・・だろうと思う」といった非断定的で曖昧な表現を使うことが多いことに気がついた。スーパービジョンの時に、クライアントに彼がノン・アサーティブであることを指摘し、もう少し断定的な表現を使うことが提案され、どのようにそれを実行するかが話合われた。

その手法は Joseph Wolpe (1958)⁴³⁾ (1969)⁴⁴⁾ が考案し Systematic Desensitization (系統的脱感作法) の「ク

ライアントが不安を感じない範囲で、少しずつ不安の対象に挑戦する」という考えを基本にしながら、クライアントが自分の立場や権利を相手や周囲の人たちを傷つけないように配慮しながら主張する、アサーション・トレーニングを面接中に実行させることから始まった。こうして伝統的なケースワーク面接をおこないつつ、少しずつその中に行動アプローチを導入するという形をとったのである。帰国した筆者は彼の実践の場であった大阪通信病院の神経科の外来で、1年間のインターンシップの間に身につけた行動アプローチを少しずつ試み始めた。

3. Wolpe, J. との出会い

1973年に日本異常行動研究会は Joseph Wolpe を我が国に招いて東京、大阪、広島、福岡でワークショップを開催した(異常行動研究会1975)⁴⁵⁾。筆者は大阪で通訳を勤めたことが縁で、フィラデルフィアの Wolpe のクリニックで夏の間のインターンシップを経験する機会に恵まれた。この期間に Wolpe をはじめ彼のもとで行動アプローチを実践している精神医、臨床心理士、PSW といったスタッフに加えて、全米から行動アプローチの権威者たちが駆けつけて、スタッフと一緒に講義とデモンストレーションをおこなって指導してくれたのである。また、インターンは、毎日自分が担当するクライアントを面接し、週に2回のスーパービジョンを受ける機会がもうけられた。また Wolpe 自身が患者を毎日面接して、行動アプローチを使って治療している様子を、ビデオカメラを通してインターンたちが同時並行で観察出来るという素晴らしい臨床学習の機会に恵まれた(武田1975)⁴⁶⁾。

行動アプローチについては、クライアントを動物実験と同じように扱うのではないか、公式的で冷たいやり方であろう、クライアントの気持ちを汲む配慮に欠けるのではないかといった疑問が投げかけられることが少なくない。しかし、Wolpe がクライアントを面接するときの表情は実に暖かく、声は低く小さいがゆったりとしたテンポで話しかけ、相手が話すのを待ち、熱心に耳を傾け、うなずき、ときにはにっこり笑顔を見せるのであった。その表情や動作からは、クライアントに対する受容、共感、傾聴、尊重、暖かさといっ

たものを十分にくみ取ることができた。ただ、こうしたものは、具体的に測ることが難しい質のものである。そのために、Wolpeをはじめ多くの行動アプローチの先達たちは、そうした客観的に測定しにくい態度的な面を、行動アプローチの本のなかで、あえて取り上げようとしてこなかったことが、行動アプローチに対する誤解と批判を招いているのではないだろうか。

このことを、日本の行動アプローチのリーダーの一人である久野能弘に尋ねると、「受容、共感、傾聴といった態度的なものは、治療や援助に必須の前提条件ですよ。当然のことですよ。だから、行動アプローチの本のなかには、ことさらに取り上げて書いてないのです」と答えるのであった。しかし、それにも関わらず、行動アプローチに対して「非人間的である」「冷たい」といった批判がある(西村1978)⁴⁷⁾ことは残念である。

Wolpeは柔らかい表情や態度ではあるが、講義のなかでは結構厳しいことも話された。「精神分析の理論は難解だし複雑である。しかし、どんな症状や問題を持つ患者にも同じような治療をおこなっている。一方、行動アプローチの理論は簡単だが、実践する治療ないし援助方法は患者の問題に応じてさまざまである。一つのやり方で効果がなかったら、別の方法を使うことが出来る」と最初の講義で語ったのであった。また、クライアントの症状の改善あるいは好転に援助者は責任があることが強調された。クライアントが協力したのに改善ないし効果がなかったならば、援助方法そのものに問題があることを率直に認めなくてはならないと説いた。クライアントの行動を間違えて理解したか、援助方法そのものに欠陥がなかったならば、援助方法の使い方が悪かった可能性があると言うのであった。それは、援助者の倫理的な問題も含むという、自らに厳しい姿勢であった。その時、筆者はさして気にとめずに聞いていたが、Wolpeが話した援助方法の選択と変更が、後に自分の担当ケースに必要なようになってくるとは思ってもいなかった。

筆者は旅客機に乗って上空にあがることが出来ない「飛行機恐怖症」の男性を担当した。ところが、いざ面接を始めると、Wolpeが開発したイメージを浮かべて、イメージのなかでごく少しずつ不安を克服する

系統的脱感作法がスムーズにはいかなかった。系統的脱感作法は、イメージのなかで、患者が不安を感じる対象にほとんど不安を感じない範囲で徐々に近づけ、少しずつ不安を克服していくという治療方法である。ところが、このクライアントは「私はイメージを浮かべることが出来ない」と言うのであった。Wolpeのクリニックでは毎日午後3時に「ティータイム」がある。スタッフとインターンが一堂に会して自由に話し合える一時である。筆者はWolpeに「私の患者はイメージを浮かべられないと言うのですが」と訴えた。Wolpeは「それはよくあることです。イメージを浮かべる練習から始めなさい。それで駄目なら、目の前になにかを置いてそれをよく見てもらい、次に目を閉じてそれをイメージさせるといい」と言う。「まず、はじめに、自分の家族とか家を思い浮かべさせてみたら」ということであった。

Wolpeの教え通りにやってみると、患者はイメージを浮かべられるようになった。次は、イメージのなかで、飛行機に乗り込む練習である。イメージのなかで患者は大嫌いな飛行機に乗りこみ、どんどん上空に上がったが、不安が高くなったとは言わない。「飛行機で上空まで上がったのに、不安を感じませんか」と尋ねると、「イメージの中ですから、不安はありません」という答えである。次のスーパービジョンでこの点を相談すると、スーパーバイザーは「実際の飛行機に乗る現実脱感作法でやろう」ということになった。ところが、患者は「病院のスタッフが操縦する飛行機は『降りて下さい』と言えば、すぐ降りてくれるから、そんな飛行機は怖くない」と言う。スーパーバイザーは「それでは、『逆説的志向』でやろう」と言った。ただ、ここで提案された逆説的志向という方法は、ナチスの強制収容所に入れられていた実存分析家であるViktor E. Franklが開発した治療方法である。フランクルは患者が自分で自分に向かって「もっと怖くなれ」と語りかけるのに対して、Wolpe流は援助者が側について、「怖いだろう」「もっと怖くなるぞ」と語りかけるのである。この一種の逆説療法も、それなりの効果があがったことを確認できた。しかし、その理論的説明はまだ不十分であることを感じた。

4. リスポンデント条件付けからオペラント条件づけへ

Wolpe のところから帰国した筆者は神経科の外来で、恐怖症、不登校、性的な問題などの症状をもつ患者に、夏のインターンシップで習った治療方法を使ってその効果を確認した（武田 1975）⁴⁸⁾。また、米国の大学教員を筆者が教える関西学院大学社会学部社会福祉専攻に招いた。ハワイ大学から Gilfred Tanabe が客員教授として1年間滞在した。大学院と学部で行動アプローチを講義し、筆者は通訳であった。Tanabe はペアレント・トレーニングについて講義をすることを通して、オペラント条件づけの理論と方法を社会福祉学専攻の大学院生に解説した。筆者は通訳をしながら多くの質問を放ち、自らの知識の拡大を図った（芝野 2009）⁴⁹⁾。また、シラキュース大学から『Helping People Change』（1975）⁵⁰⁾ の編者として知られる Arnold P. Goldstein が来て、関西学院大学で講義をするとともに、大阪・兵庫の地方自治体の社会福祉施設従事者を中心として研修会をおこなった。彼は暴力に対応するにはどうするかといった大がかりな問題と取り組んでおり、講義のなかでリスポンデント条件付けの対象範囲と違い、オペラント条件づけの応用範囲の広さを強調した。彼は帰国後も、自分の活動を実証するかのようになり、彼の行動アプローチの成果を多くの書物として出版し、筆者にとどけた（Goldstein）⁵¹⁾。こうした経験が、次第に筆者の目をオペラント条件づけにもとづく行動アプローチに向けさせたのである。

1977年、筆者はフルブライト招聘客員研究員としてミシガン大学社会福祉大学院で1年間過ごすこととなった。数ある北米の社会福祉大学院のなかからミシガン大学を選んだのは、友人の P.E. Glasser と社会福祉における行動アプローチの第一人者である E.J. Thomas の存在であった。

ミシガン大学に着くと、Glasser に連れられて早速 Thomas を訪問した。彼は筆者がどのような背景を持ち、何故行動アプローチに関心を持つようになったかを尋ねた。そのなかで、筆者が Wolpe のところで訓練を受けたことに非常に関心を示すとともに、Wolpe のクリニックとそこでの訓練について質問を連発した。その後 Glasser は別の行動アプローチの科目を担当す

る D. Himlie と R.D. Carter の二人に紹介の労を取ってくれた。こうして、筆者の行動アプローチへの新しい旅立ちが始まった。

1年間の滞在中にできるだけ多くのことを学びたいと、修士の1年生の基礎演習から、博士課程の調査についての授業や文献紹介のクラスまで出席した（芝野 2009）⁵²⁾。そのなかで、行動アプローチに関するものとしては、前述の Thomas が担当する博士課程の調査研究と調査方法、Himlie が担当する認知を含む行動理論の基礎理論と臨床方法、Carter が担当する基礎的な調査方法やペアレント・トレーニングを含む実践方法などが通年の行動アプローチ関連の授業であった。このほか、Rothman & Thomas（1980）⁵³⁾ は毎週1回夜に教員のための研究会を開いていた。ここでは、各教員が順番に自分の研究調査の計画と実施内容を発表するものであった。Thomas は社会福祉大学院の教員のなかでも、明らかに一目置かれた存在であり、多くの教員は彼の前で発表することに相当緊張を感じていた。また、事実発表の内容が Thomas の期待を満たさないようなレベルのものだと、痛烈な批判の言葉が飛ぶこともあった。一方、Tripodi, T（1994）⁵⁴⁾ のように、Thomas が一目置くような調査のエキスパートも少なくなかった。北米のメジャーの大学院の底力を見せつけられた1年間であった。

5. 客観的な測定がしやすい行動アプローチ

Thomas らが行動アプローチを用いてクライアントを援助することに魅力を感じた理由の一つは、効果測定が比較的やりやすい点だと考えられる。医療、精神保健、教育と同じく、社会福祉の実践領域においても、援助ないし介入の効果を厳しく問われるようになってきていた。しかし、効果測定のためには、対象の統制（コントロール）と介入（サービスの提供）の結果を客観的に評価することが出来なくてはならない。そのためには、実験群と統制群というデザインを使うことにより、強力な因果関係の確立が可能になることは言うまでもない。

しかし、現実には福祉の第一線において、実験群と統制群に分けるために、無作為に選び無作為に割り当

てるということは極めて難しい。誰が援助を受け、誰が受けないのかといった倫理的な問題を伴う。また、統制群としてクライアント以外の人に頼むことも極めて困難である。さらに、その調査の妥当性を問われることになりかねないし、倫理的な問題が起こる危険性もある。仮に倫理的な諸問題を解決できたとしても、福祉の第一線では、一人のワーカーが数多くのクライアントを対象に活動し、実験調査をすることは困難である。対象者の数が少なければ、それだけ個人差が介入結果に反映されることが多くなる。そして、調査結果の妥当性が低くなる。こうした諸点を考えると、一口に実験計画といっても、それを福祉の現場で実行しようとする、多くの困難にぶつかる。

そうした問題を回避し、なおかつ援助ないし介入を実験計画としておこなおうとする場合に、当時も今も用いられているのがシングル・システム・デザイン（単一被験体実験法）である（平山2003）⁵⁵⁾。まず、援助を開始する前のクライアントの状態を、一定期間観察あるいはその他の方法でチェック（ベースライン）しておく。次に、援助をおこなっている間の状態をチェックする。そして、援助が終わったら、また、クライアントの状態をチェックするといったデザイン（A - B - A）である。A - B - A - B デザインはより強力である。また、ベースラインの観察期間をとらずに、直ぐに介入をはじめなくてはならないときには、B - A - B デザインが考えられる。1人のクライアントの幾つかの問題に時間差をつけて介入するとか、複数のクライアントに時間差をつけて介入する多層ベースラインがある。このデザインは倫理的あるいは実践上の理由で介入を中断できないような場合、あるいは持ち越し効果の可能性がある場合でも、介入効果を明らかにすることが可能なデザインである。ミシガン大学社会福祉大学院ではこうした調査のデザインを修士課程の授業で教えていた。

一方、Thomas は Research & Development (1978)⁵⁶⁾ という考え方を提唱し、Rothman (1980)⁵⁷⁾ とともに研究を重ね、そのアプローチを Developmental Research and Utilization（開発的調査と活用）と呼んだ。彼らのそうした一連の調査と実践の統合への試みは、芝野 (2002)⁵⁸⁾ によって詳細に紹介されている。また、

芝野自身の手によってさまざまな実践が試みられている（芝野1984）⁵⁹⁾（桑田・芝野1990）⁶⁰⁾。

Ⅲ 我が国の社会福祉における行動アプローチ

1978年にミシガン大学から関西学院大学に帰ってきて筆者は、1年間に学んだ社会福祉における行動アプローチを、少しずつ大学院教育の現場に根付かせようとした。まず、従来からおこなわれていた精神分析的なアプローチをあくまでも第一の流れに置きながら、心理学研究科から新浜邦夫、宮田洋、今田寛、荒木光の4人による行動理論とその歴史についての講義と、兵庫医大の久野能弘による行動アプローチの方法論という2つの特殊講義を新しく開設し、自らも演習で大学院生とともに社会福祉における行動アプローチについて学んだ。また、卒業生との連携も試みた。

例えば、立木茂雄は淀川キリスト教病院社会事業部で実習し、竹内一夫の指導を受けながら、患者の子どもに行動理論にもとづくペアレント・トレーニングをおこなった（1979）⁶¹⁾。また、筆者とともにペアレント・トレーニングの理論と方法を詳しく紹介している（1981）⁶²⁾。

筆者がミシガン大学社会福祉大学院で学んだペアレント・トレーニングは神戸児童相談所長の小前千春の計らいで同相談所の所員との勉強会を通して種がまかれ、やがて留学から帰国した芝野松次郎（2002）⁶³⁾ の努力によって、神戸市総合児童センターでの GPT（グループ・ペアレント・トレーニング）へと発展した。心理学領域との交流は、関西学院大学の卒業生で行動アプローチを実践している者との密接な提携をおこなった。特に、久野能弘（1993）⁶⁴⁾ と佐久間徹（1988）⁶⁵⁾ は多くの関西学院大学社会福祉学専攻の大学生と大学院生の実習指導を助けた。その中から社会福祉における行動アプローチの牽引車となる人物が誕生した。

芝野は京都大学の河合隼雄の薦めで筆者を訪ね、関西学院大学大学院で社会福祉学を専攻した。彼は精神分析的なアプローチを期待していたが、筆者の関心が行動アプローチに大きく転換しつつある時期であり、彼もまた次第に行動アプローチの世界に入っていくの

であった(芝野2009)⁶⁶⁾。特に、ハワイ大学のTanabe(2009)⁶⁷⁾との出会いは、芝野に大きな影響を与えた。留学にあたって、彼はTanabeや行動アプローチと社会福祉調査法で知られているJoel Fischer⁶⁸⁾のいるハワイ大学も考えたが、最終的にはThomasのミシガン大学で修士の学位を取得した。その2年目には、フルブライト招聘各員研究員として同大学へきた筆者とともにThomasらの授業に出席した。その後、芝野はPinkston, E.M. (1982)⁶⁹⁾のいるシカゴ大学社会福祉大学院に移り博士の学位を取得して関西学院大学へ帰った。なお、彼の博士論文はシングル・マザーにおこなった行動アプローチ的介入の効果測定である(1983)⁷⁰⁾。彼は現在関西学院大学人間福祉学部長であり、日本行動療法学会の常任理事であり、編集委員でもある。

芝野は後輩の育成と教え子へのサポートに全力を注いでいる。一緒に実験的な新しい調査をするだけでなく、その過程と結果をともに論文としてまとめ発表している。遠藤和佳子(1998)⁷¹⁾とは養護施設における早期復帰のプログラム、遠藤史子(1999)⁷²⁾とは、老人保健施設における高齢者の行動変容に刺激統制とディファレンシャル法(DA法)を使った試みをしている。児童虐待の研究を続けているのが原佳央理(2001)⁷³⁾である。また、橋本裕理と森本美千子(1993)⁷⁴⁾も手法は違うが、児童虐待の目撃者に対するアセスメント指標と取り組んでいる。さらに、児童虐待についてのケースマネジメントのマニュアルを寺本典子(2000)⁷⁵⁾(2001)⁷⁶⁾と作成している。ソーシャルワークにおけるR&Dは桑田繁(1990)⁷⁷⁾も中川千恵美(1993)⁷⁸⁾も芝野と論文を発表している。芝野のもう一つの大きなプロジェクトは、神戸市総合児童センターを中心に、若い母親に対しグループでペアレント・トレーニングをおこなっていることである(1989-2000)⁷⁹⁾。さらに、芝野の非常に大きな業績は、行動アプローチを基盤にした社会福祉理論の確立とも言える『社会福祉実践モデル開発の理論と実際：プロセスティック・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント』(2002)⁸⁰⁾を出版したことである。このなかでThomas, E.J.らのその後の研究の紹介と、芝野が独自に開発し、我が国において実践・研究した成果を詳細に紹介している。

社会福祉から心理学の領域に移り、社会福祉と心理学の両分野での行動変容アプローチで活躍していた桑田繁にも指導の手を差しのべた。シカゴ大学の社会福祉大学院のPinkston, E.M. (1984)⁸¹⁾と彼女の夫であり行動心理学者であるBear, D.M. (1997)⁸²⁾、さらには同じシカゴ大学社会福祉大学院のSchwartz, A. (1975)⁸³⁾を集中講義に関西学院大学に招き、自ら通訳を買って出て、大学院生や桑田のように関心のある卒業生を引き合わせている。しかし、桑田は若くして急逝した。芝野や仲間たちは彼の死を悼み、彼の全ての業績を一冊にまとめて出版している(1990)⁸⁴⁾。

芝野のグループで忘れることが出来ないのが野口啓示である。野口は関西学院大学大学院からセントルイスのワシントン大学社会福祉大学院で学んだ。帰国後、神戸の少年の町で児童指導員(現在施設長)をしながら博士後期課程に進み、芝野の指導を受け児童虐待に関する研究で博士の学位(2008)⁸⁵⁾を取得した。そして、この領域での実践と研究を続ける(2008)⁸⁶⁾とともに、児童虐待の解決を目指したペアレント・トレーニングについて多くの発表をしている(2003)⁸⁷⁾(2006)⁸⁸⁾(2006)⁸⁹⁾(2007)⁹⁰⁾(2007)⁹¹⁾。こうした一連の介入とその結果を研究するに先立ち、ネブラスカ州オマハの少年の町と提携し、そこで出版された『Common Sense Parenting』を翻訳(2002)⁹²⁾するだけでなく、自らの経験をもとにペアレント・トレーニング(PT)に関する本(2009)⁹³⁾、教材、ビデオの作成、PT指導者の養成もおこなっている。

津田耕一は知的障害者福祉施設で長い間の実践経験をもつ研究者である。大学と大学院時代には筆者の研究室に属していたが、臨床訓練は佐久間徹の指導を受け、フリーオペラントを用いて自閉症児の言語訓練に参加した(1993)⁹⁴⁾。そうした経験をもとに、知的障害者への自立生活行動の形成を試みている(1996)⁹⁵⁾。さらには、ソーシャルワークにおける行動療法アプローチの意義について日本行動療法学会誌で論じている(2003)⁹⁶⁾。また多くの社会福祉専門書に、行動アプローチに関するテーマで執筆している(2002)⁹⁷⁾(2005)⁹⁸⁾。彼の近著(2008)⁹⁹⁾はその背後にエビデンス・ベースド・プラクティスの考え方の裏付けがうかがわれる新しい社会福祉専門書として注目

すべき書だと言えよう。

さまざまな障害者福祉の分野で活躍している三原博光は、社会福祉の芝野と筆者、心理学の久野と佐久間と2つの領域にまたがって行動アプローチを学んだ。また、何度もドイツに渡りヨーロッパの障害者福祉や高齢者福祉についての見聞を広めた。彼は多くの論文や著書を発表している。知的障害者の自転車修理についての実験研究(1988)¹⁰⁰⁾は、日本行動療法学会賞の候補にあがった彼のデビュー論文の1つである。彼の研究は大きく分けると、知的障害者福祉(1985)¹⁰¹⁾(1987)¹⁰²⁾(1988)¹⁰³⁾(1991a)¹⁰⁴⁾(1991b)¹⁰⁵⁾、身体障害者福祉(1993)¹⁰⁶⁾(1994)¹⁰⁷⁾、高齢者福祉(1998)¹⁰⁸⁾(1999)¹⁰⁹⁾(2004)¹¹⁰⁾(2004)¹¹¹⁾である。このほか、彼は行動変容アプローチを社会福祉実習前の指導にも応用している(1995)¹¹²⁾。さらに、障害者福祉に関しての入門書(2002)¹¹³⁾や外国の障害者あるいは高齢者福祉の紹介(2004)¹¹⁴⁾をしている。さらに、障害者に対する行動アプローチの事例を中心にした専門書(2006)¹¹⁵⁾がある。

筆者は、関西学院大学から関西福祉科学大学へ移り大学院生を教えながら、大学の心理・教育相談センターの久保信代と宿谷仁美とともに、大学院生の臨床実習の一つとして、地域の母親のためのペアレント・トレーニングをおこなっている(2003)¹¹⁶⁾。そうした試みのなかから高城大(2003)¹¹⁷⁾(2003)¹¹⁸⁾、藤島恵(2005)¹¹⁹⁾、友安菜美子(2006)¹²⁰⁾、岡美奈(2007)¹²¹⁾、白木加奈子(2007)¹²²⁾、六川徳子(2007)¹²³⁾が親を通しての子どもの行動変容に関するさまざまな効果測定で修士論文をまとめている。また、スポーツのコーチングに行動アプローチを適用して成果を上げている(1985)¹²⁴⁾(2007)¹²⁵⁾。こうした活動に対して、2009年に、日本行動分析学会から表彰を受けた。このほか、行動アプローチの理論はスーパービジョンにも適用される(1986)¹²⁶⁾。スーパーバイザーにとって「達成可能な目標」、「少しずつ目標を高くしてゆく」、「区切って教える」、「どうするかをやって見せる」、「結果を直ぐにフィードバックする」、「注意点を始める前あるいは途中で伝えること」といったことの重要さは、社会福祉領域でのスーパービジョンにも、スポーツのコーチングにおいても共通の指導方法であり注意点ある。

我が国の社会福祉における行動アプローチはまだまだ小さな流れにしか過ぎない。しかし、日本行動療法学会では社会福祉を精神医学、心理学とならんで、1つの重要な分野として認め、常任理事会や編集委員会に芝野を招き、また社会福祉領域に絞った特集を発刊している。

社会福祉の領域で活躍する者のなかには、行動アプローチを社会福祉方法論の主たる理論的枠組としている者もいれば、あくまで副次的なものとする者もいるであろう。あるいは、調査の枠組みづくりに使うという人もいると考えられる。さまざまなかたちで、各人はそれぞれの目的のために行動理論を使うことにより、今後の社会福祉の実践と教育の進歩に貢献してゆくことを願っている。そして、クライアントを理解するための理論的枠組みと、クライアントを援助する方法の裏づけとなる理論の両者が不可欠であることを強調したい。社会福祉士や精神保健福祉士の養成が大きな社会的責任になってきている現在、援助の裏付けになる理論の教育が求められる。今後、社会福祉のさまざまな領域で、ここで取り上げた理論と方法がさらに発展することを望んでやまない。

文献表

- 1) Richmond, M. (1917) Social Diagnosis, Russell Sage Foundation.
- 2) 黒川昭登(1985)『臨床ケースワークの基礎理論』誠信書房,38.
- 3) Richmond, M. (1922) What is Social Casework?, Russell Sage Foundation, (= 1963, 杉本一義訳『人間発見と形成』誠信書房.)
- 4) 黒川昭登(1985) 前掲書,38-39.
- 5) Jones, E.J. (1961) The Life and Work of Sigmund Freud, Basic Books Publishing Co, (=1964, 竹友安彦・藤井治彦共訳『フロイトの生涯』紀伊国屋書店,269-74.)
- 6) 黒川昭登(1985) 前掲書,38.
- 7) 同書,38-39.
- 8) Hamilton, G. (1940) (2nd. 1951) Theory and Practice of Social Casework, Columbia University Press. (= 1951, 仲村優一他訳『ケースワークの理論と実際 上・下』有斐閣.)
- 9) Towle, C. (1952) Common Human Needs, American Asso-

- ciation of Social Workers (= 1966, 黒木利克監修 村越芳男訳『公的扶助ケースワークの理論と実際—一人間に共通な欲求—』全国社会福祉協議会。)(= 1990, 小松源助訳『コモン・ヒューマン・ニーズ』中央法規出版。)
- 10) Hollis, F. (1964) Casework: A Psychosocial Therapy, Random House. (= 1966, 黒川昭登・本出裕之・森野郁子訳『ケースワーク - 心理社会療法』岩崎学術出版社。)
- 11) 丹野真紀子 (2005) 「心理社会的アプローチ」久保絃章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店, 14.
- 12) 黒川昭登 (1985) 前掲書, 52.
- 13) 高山恵理子 (2005) 「機能的アプローチ」久保絃章・副田あけみ『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店, 12.
- 14) 黒川昭登 (1985) 前掲書, 34-38.
- 15) Rogers, R.C. (1939) Clinical Treatment of the Problem Child, Houghton Mifflin.
- 16) Rogers, R.C. (1942) Counseling and Psychotherapy, Houghton Mifflin.
- 17) 高山恵理子 (2005) 「機能的アプローチ」久保絃章・副田あけみ『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店, 20.
- 18) Rogers, R.C. (1951) Client-centered Therapy, Houghton Mifflin (= 1958, 友田不二男『人格の心理と教育』岩崎書店。)
- 19) 仲村優一 (1957) 「海外の影響とその消化 - ケースワーク」『社会事業』40 (8) ,62-67 in 高山恵理子 (2005) 「機能的アプローチ」久保絃章・副田あけみ『ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店。
- 20) Biestek, F.P. (1957) The Casework Relationship, Loyola University Press. (= 1996 尾崎新・福田俊子・原田和幸訳『ケースワークの原則：援助関係を形成する技法』[新訳版] 誠信書房。)
- 21) 黒川昭登 (1985) 前掲書, 34-38.
- 22) Perlman, H.H. (1957) Social Casework: A Problem Solving Process, The University of Chicago Press. (= 1966 松本武子訳『ソーシャル・ケースワーク問題解決の過程』全国社会福祉協議会。)
- 23) Hollis, F. (1964) Social Casework: Psychosocial Therapy, Random House. (= 1966 黒川昭登・本出祐之・森野郁子共訳『ケースワーク - 心理社会療法』岩崎学術出版社。)
- 24) Smalley, R.E. (1967) Theory for Social Work Practice, New York: Columbia University Press.
- 25) Thomas, E.J. (1967) The Socio-Behavioral Approach: Illustrations and Analysis in Thomas, E.J. (ed.) Socio-Behavioral Approach and Applications to Social Work, Council on Social Work Education.
- 26) Scherz, F.H. (1970) Theory and Practice of Family Therapy, Roberts, R.W. & Nee, R.H. eds. Theories of Social Casework, The University of Chicago Press. (= 1985 久保絃章訳『ソーシャルケースワークの理論：7つのアプローチとその比較』川島書店。)
- 27) Rapoport, L. (1970) Crisis Intervention as a Mode of Brief Treatment, Roberts, R.W. & Nee, R.H. eds. Theories of Social Casework, The University of Chicago Press. (= 1985 久保絃章訳『ソーシャルケースワークの理論：7つのアプローチとその比較』川島書店。)
- 28) Simon, B.K. Social Casework Theory Overview, Roberts, R.W. & Nee, R.H. eds. Theories of Social Casework, The University of Chicago Press, 353-94.
- 29) Roberts, R.W. & Nee, R.H. eds. Theories of Social Casework, The University of Chicago Press. (= 1985 久保絃章訳『ソーシャルケースワークの理論：7つのアプローチとその比較』川島書店。)
- 30) Germain, C.B. & Gitterman, A. (1987) Ecological Perspective, Encyclopedia of Social Work, (18th ed) National Association of Social Workers, 488-99.
- 31) Germain, C.B. & Gitterman, A. (1996) The Life Model of Social Work Practice: Advances in Theory and Practice (2nd ed) ,Columbia University Press.
- 32) 芝野松次郎 (2002) 『社会福祉実践モデル開発の理論と実際：プロセティック・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント』有斐閣。
- 33) Thomas, E. J. (1967) The Socio-Behavioral Approach: Illustrations and Analysis, in Thomas, E.J. (ed) Socio Behavioral Approach and Applications to Social Work, Council on Social Work Education.
- 34) Thomas, E. J. (1971) Behavioral Modification and Casework, in Roberts, R.W. & Nee, R.H. (eds.) Theories of Social Casework, University of Chicago Press, 181-218.
- 35) Stuart, R.B. (1967a) Behavioral Control of Overeating, Behavioral Research and Therapy, 5, 357-365.
- 36) Stuart, R.B. (1967b) Casework Treatment of Depression Viewed as an Interpersonal Disturbance, Social Work, 12, 27-36.
- 37) Stuart, R.B. (1971) Behavioral Contracting with the families of Delinquents, Behavior Therapy and Experimental Psychiatry, 2, 1-11.
- 38) Stuart, R.B. and Davis, B. (1972) Slim chance in a Fat World, Research Press.
- 39) Rose, S.D. (1973) Treating Children in Group, Jossey-Bass Publishers.
- 40) 武田建・大利一雄共著 (1980) 「行動理論にもとづくグループワーク」『新しいグループワーク』日本 YMCA 同盟出版部, 185-293.
- 41) Thomas, E.J. & Carter, R.D. (1977) Instigative Modification with a Multi-Problem Family, Social Casework, 444-455.
- 42) Gambrell, E.D. (1977) Behavior Modification : Handbook of Assessment, Intervetion, and Evaluation, Jossey-Bass, Inc. Publishers.

- 43) Wople, J. (1958) Psychotherapy by Reciprocal Inhibition, Stanford University Press.
- 44) Wolpe, J. (1969) The Practice of Behavior Therapy, Pergamon Press. (= 1970 内山喜久雄監訳『行動療法の実際』黎明書房) / 武田建 (1973) 臨床家のためのこの一冊: ウォルピ著 行動療法の実際, 『臨床心理学』5,293-96)
- 45) 異常行動研究会 (1975) 『脱感作療法』誠信書房.
- 46) 武田建 (1975) 行動療法の初回面接『関西学院大学社会学部紀要』30,25-33.
- 47) 西村章次 (1978) 『行動療法批判: アメリカの障害者教育の現状と日本課題』ぶどう社.
- 48) 武田建 (1975) 「市場に1人で行けぬ不安神経症患者への系統的脱感作法の適用」異常行動研究会『脱感作療法』誠信書房,125-33.
- 49) 芝野松次郎 (2009) 我が師を語る [23]「角の取れた鬼コーチは生涯現役の師」『ソーシャルワーク研究』35 (3), 260-63.
- 50) Kanfer, F.H & Goldstein, A. P. (eds.) (1975) Helping People Change, Pergamon.
- 51) Goldstein, A.P., Sprafkin, R.P., Gershaw, N.J. & Klein, P. (1980) Skill-streaming the Adolescent: A structured learning approach to teaching prosocial skills, Research Press./ Goldstein, A.P. (1988) The Prepare Curriculum Teaching: Prosocial Competencies, Research Press./Goldstein, A.P. & Glick, B. (1987) Aggression Replacement Training: A comprehensive intervention for aggressive youth, Research Press./ Goldstein, A.P. (1991) Delinquent Gangs, Research Press./ Goldstein, A.P., Harootunian, B., & Conoley, J.C. (1994) Student Aggression: Prevention, control and replacement, Guilford/Goldstein, A. P., Palumbo, J., Stripling, S., Voutsinas, A.M. (eds.) (1995) Break It Up : A Teacher's Guide to Managing Student Aggression, Research Press./Goldstein, A.. (1996) . Violence in America, Davis-Black Publishing/ Goldstein, A. (1996) The Psychology of Vandalism, Plenum Press.
- 52) 芝野松次郎 (2009) 前掲書, 260-63.
- 53) Rothman, J. & Thomas, E.J. (1994) Intervention Research: Design and Development for Human Services, Haworth Press.
- 54) Tripodi, T. (1994) A Primer Single Subject Design for Clinical Social Workers, NASW Press.
- 55) 平山尚・武田丈・藤井美和 (2002) 『ソーシャルワーク実践の評価方法—シングル・システム・デザインによる理論と方法』ミネルヴァ書房.
- 56) Thomas, E.J. (1978) Mousetraps, Developmental Research, and Social Work Education, Social Service Review, 52, 468-483.
- 57) Rothman, J. (1980) Social R and D: Research and Development in the Human Services, Prentice-Hall.
- 58) 芝野松次郎 (2002) 前掲書.
- 59) 芝野松次郎 (1984) 「ソーシャル・ワークにおける R&D」『青少年問題研究』33,65-78.
- 60) 桑田繁・芝野松次郎 (1990) 「ソーシャルワーク実践における R&D の試み: 0 歳児をもつ親に対する母子相互作用スキル指導プログラムの調査開発例」『関西学院大学社会学部紀要』61,49-82.
- 61) 立木茂雄 (1979) 「親による行動変容アプローチ」関西学院大学大学院社会学研究科修士論文 (未刊行)。
- 62) 武田建・立木茂雄 (1981) 『親と子の行動ケースワーク』ミネルヴァ書房.
- 63) 芝野松次郎 (1989-2000) 『行動療法しつけ児童事業 育ちゆく子供: 予防・指導の実践と研究』I-V 神戸市児童センター.
- 64) 久野能弘 (1993) 『行動療法』ミネルヴァ書房.
- 65) O'Donohue, W. & Ferguson, K.E. (2001) the Psychology of B.F. Skinner, Sage Publication, Inc. (= 2005) 佐久間徹監訳『B.F. スキナーの心理学』二瓶社.)
- 66) 芝野松次郎 (2009) 前掲書, 260-63.
- 67) 同書, 260-63.
- 68) Bloom, M, Fischer, J. & Orme, J. (1999) Evaluating Practice: Guidelines for the Accountable Professional, 3rd ed. Allyn & Bacon.
- 69) Pinkston, E.M., Levitt, J.L., Green, G.R., Linsk, N.L. & Rzepnicki, T.L. (1982) Effective Social Work Practice: Advanced Techniques for Behavioral Intervention with Individuals, Families, and Institutional Staff, Jossey-Bass Publishers.
- 70) Shibano, M. (1983) Development and Evaluation of a Program of Maximizing Maintenance of Intervention Effects with Single Parents, Unpublished Doctoral Dissertation, School of Social Service Administration, the University of Chicago.
- 71) 遠藤和佳子・芝野松次郎 (1998) 「養護施設にける早期家庭復帰援助プログラムの研究開発 (R&D) : パーマネンシーの保障に向けて」『ソーシャルワーク研究』23,4,19-29.
- 72) 遠藤史子・芝野松次郎 (1999) 「老人保健施設における頻回な要求行動を示す高齢者に対する行動療法: 刺激統制とディファレンシャル法 (DA 法) に基づく環境変化の効果」『行動療法研究』24,1,1-14.
- 73) 原佳央理 (2001) 「児童相談所における児童虐待ケースマネジメント実施の質的分析 (ケース内容とセミ・ストラクチャーインタビューによる) ケースマネジメント実践モデルの構築に向けて」関西学院大学大学院社会学研究科修士論文 (未刊行)。
- 74) 橋本裕理・森本美千子 (1993) 「子どもの虐待ホットラインにおける目撃者に対するアセスメント指標の作成」『関西学院大学社会学部紀要』68,121-30.
- 75) 寺本典子 (2000) 「ケースマネジメントによる児童虐待ソーシャルワーク援助」『関西学院大学社会学部紀要』85 号.

- 76) 芝野松次郎編著 (2001) 『子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアル』有斐閣。(寺本典子CD-ROMマニュアル作成)
- 77) 桑田繁・芝野松次郎 (1990) 「ソーシャルワーク実践におけるR&Dの試み:0歳児を持つ親に対する母子相互作用スキル指導プログラムの調査開発例」『関西学院大学社会学部紀要』61,49-82.
- 78) 中川千恵美・芝野松次郎 (1993) 「ソーシャルワークのR&Dにおける普及(Dissemination)の試み:『親と子のふれあい講座』出張講座を通して」『関西学院大学社会学部紀要』67,131-42.
- 79) 芝野松次郎 (1989-2000) 前掲書, 神戸市児童センター.
- 80) 芝野松次郎 (2002) 『社会福祉実践モデル開発の理論と実際:プロセシク・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント』有斐閣.
- 81) Pinkston, E.M. & Linsk, N.L. (1984) Care of Elderly: A Family Approach, (= 1992. 浅野仁・芝野松次郎監訳『高齢者の在宅ケア:家族に対する新しいアプローチ』ミネルヴァ書房.
- 82) Baer, D.M. & Pinkston, E.M. eds. (1997) Environment and Behavior, Westview Press.
- 83) Schwartz, A. & Goldiamond, I. (1975) Social Casework: A Behavioral Approach, Columbia University Press.
- 84) 桑田繁 (2003) 『福祉・心理の臨床場面における治療効果に関する研究-桑田繁遺作集』関西学院大学出版会.
- 85) 野口啓示 (2008) 「被虐待児の家族再統合実践モデルおよび実践マニュアルの開発的研究:M-D&D 開発研究からのアプローチ」関西学院大学大学院博士論文(未刊行).
- 86) 野口啓示 (2008) 『被虐待児の家族支援:家族再統合実践モデルと実践マニュアルの開発』福村出版.
- 87) 野口啓示 (2003) 「児童虐待への取り組み-ペアレント・トレーニングを用いた親へのアプローチ」『行動療法研究』29 (2), 107-18.
- 88) 野口啓示・芝野松次郎・李政元 (2006) 「因子分析を用いた尺度開発手法を活用した開発的研究-被虐待児の親教育支援のためのビデオ教材の開発」『社会福祉実践理論研究』15,27-41.
- 89) 野口啓示・直島克樹 (2006) 「児童虐待の家族再統合のための親教育支援プログラムの開発的研究:M-D&D 研究におけるイテレーションから導かれた kaizen の方向性」『子ども家庭福祉学』6,1-12.
- 90) 河合直樹・野口啓示 (2007) 「ペアレント・トレーニングを用いた家族統合への援助-効果測定を試み」『こどもの虐待とネグレクト』9 (3), 373 - 83.
- 91) 野口啓示・直島克樹 (2007) 「児童虐待の家族再統合のための親教育支援プログラムの開発とその普及に関する研究:M-D&D 研究の第4フェーズ(普及と詠え)の実証的研究」『子ども家庭福祉学』7,35-47.
- 92) Burke, R. & Herron, R. (1996) Common Sense Parenting, the Boys Town Press. (= 2002 野口啓示・ジョンウォン・リー『親の目・子の目:子どもは親はいらない。父親・母親が欲しい』トムソンラーニング.)
- 93) 野口啓示 (2009) 『むずかしい子を育てるペアレント・トレーニング』明石書店.
- 94) 津田耕一 (1993) 「自閉症問題への行動アプローチ:フリーオペラント法による言語訓練からの一考察」関西学院大学大学院社会学研究科博士前期課程修士論文(未刊行).
- 95) 津田耕一 (1996) 「知的障害者への自立生活行動の形成」『行動療法研究』22 (2), 43-56.
- 96) 津田耕一 (2003) 「ソーシャルワークにみる行動療法アプローチの意義」『行動療法研究』29 (2), 119-32.
- 97) 津田耕一 (2002) 「認知・行動的アプローチ」岡本民夫監修著・久保絃章・佐藤豊道・川廷宗之編著『社会福祉援助技術論(上)』川島書店, 235-40.
- 98) 津田耕一 (2005) 「行動療法とケースワーク」久保絃章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル-心理社会的アプローチからナラティブまで-』川島書店, 73-92.
- 99) 津田耕一 (2008) 『利用者支援の実践研究-福祉職員の実践力向上を目指して』久美(株).
- 100) 三原博光 (1988) 「精神遅滞者に対する自転車みがきの行動形成」『行動療法研究』14 (1), 1-10.
- 101) 三原博光 (1985) 「精神薄弱者小規模授産施設への行動変容導入の試み」『青少年問題研究』34,65-78.
- 102) 三原博光 (1987) 「精神遅滞者を中心とした障害者に対する行動変容アプローチの動向」『基督教社会福祉学研究』19,43-59.
- 103) 三原博光 (1988) 前掲書 1-10.
- 104) 三原博光・大田黒正秀 (1991a) 「或る重度精神遅滞者に対する食事指導」『基督教社会福祉学研究』23,47-53.
- 105) 三原博光、豊山大和 (1991b) 「行動変容アプローチによる精神薄弱者グループに対する余暇指導」『ソーシャルワーク研究』17 (2), 50-57.
- 106) 三原博光 (1993) 「肢体不自由児への行動変容アプローチの適用」『ソーシャルワーク研究』18 (3), 59-65
- 107) 三原博光 (1994) 「行動変容技法による肢体不自由児の減量指導」『発達障害研究』16 (2), 58-66.
- 108) 三原博光 (1998) 「行動療法による老人介護の実践的動向」『山口県立大学社会福祉学部紀要』4, 81-85.
- 109) 三原博光 (1999) 「高齢者に対する行動変容アプローチの適用」『ソーシャルワーク研究』25 (3), 53-58.
- 110) 三原博光 (2004) 「高齢者に対する行動変容アプローチに対する実践と問題点」『行動療法研究』29,133-45.
- 111) Mihara, M. (2004) Increase in verbalization of elderly person by using behavior modification approach in Japanese nursing home, Japanese Journal of Social Service, 3, 27-32.
- 112) 三原博光 (1995) 「行動変容技法による学生指導」『基督教社会福祉学研究』26/27,33-38.
- 113) 三原博光 (2002) 『障害者ときょうだい』学苑社.
- 114) 三原博光 (2004) 『介護の国際化』学苑社.

- 115) 三原博光 (2006) 『行動変容アプローチによる問題解決事例』学苑社.
- 116) 武田建・高城大 (2003) 「付属幼稚園保護者へのペアレント・トレーニングの試み」『関西福祉科学大学心理・教育相談センター紀要』1,60-65.
- 117) 同書, 60-65.
- 118) 高城大 (2003) 「ソーシャルワークにおける行動変容アプローチの今日的意義-幼稚園における子育て支援プロジェクトを例にして」関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究所博士前期課程修士論文 (未刊行).
- 119) 藤島恵 (2005) 「子育て・家族支援に対する行動変容アプローチの導入-日常生活場面におけるペアレント・トレーニングプロジェクトの実践」関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究所博士前期課程修士論文 (未刊行).
- 120) 友安菜美子 (2006) 行動変容アプローチを生かした子育て支援-幼稚園におけるペアレント・トレーニングプロジェクトの取り組みに着目して」関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究所博士前期課程修士論文 (未刊行).
- 121) 岡美奈 (2007) 「行動変容アプローチを導入した子育て支援の一考察-ソーシャルワーク・アドミニストレーションの視点を取り入れて」関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究所博士前期課程修士論文 (未刊行).
- 122) 白木加奈子 (2007) 「行動理論に基づく夜尿症児を抱えた母親へのアプローチ」関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究所博士前期課程修士論文 (未刊行).
- 123) 六川徳子 (2007) 「行動変容アプローチを用いた子育て支援への着目-幼稚園におけるペアレント・トレーニングプロジェクトを例として」関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究所博士前期課程修士論文 (未刊行).
- 124) 武田建 (1985) 『コーチング』誠信書房
- 125) 武田建 (2007) 『武田建のコーチングの心理学』創元社
- 126) 武田建 (1986) 「スーパービジョン」武田建・荒川義子編著『臨床ケースワーク』川島書店,189-99.

